

25~

49年3月20日 「学習指導要領（試案）告示」

51年7月14日

「学習指導要領（試案）改定原書」

53年8月28日

「学習指導要領を教育課程の基準とする」

58年10月13日

「小学校、中学校学習指導要領」告示

68年7月11日

（小61年制，中62.4月改定）
「小学校学習指導要領（告示）告示（71年4月改定）
⇒（小46年，中40年改定）

68年4.14日

「中学校学習指導要領（告示）告示（71年4月改定）
⇒（小46年，中40年改定）

72年4月改定（告示）

「小学校、中学校学習指導要領」告示

77年7月23日

「小学校、中学校学習指導要領（告示）告示（71年4月改定）
⇒（小46年，中40年改定）

「小学校、中学校学習指導要領（告示）告示（71年4月改定）
⇒（小46年，中40年改定）

「小学校、中学校学習指導要領（告示）告示（71年4月改定）
⇒（小46年，中40年改定）

「小学校、中学校学習指導要領（告示）告示（71年4月改定）
⇒（小46年，中40年改定）

「小学校、中学校学習指導要領（告示）告示（71年4月改定）
⇒（小46年，中40年改定）

「小学校、中学校学習指導要領（告示）告示（71年4月改定）
⇒（小46年，中40年改定）

「小学校、中学校学習指導要領（告示）告示（71年4月改定）
⇒（小46年，中40年改定）

「小学校、中学校学習指導要領（告示）告示（71年4月改定）
⇒（小46年，中40年改定）

「小学校、中学校学習指導要領（告示）告示（71年4月改定）
⇒（小46年，中40年改定）

「小学校、中学校学習指導要領（告示）告示（71年4月改定）
⇒（小46年，中40年改定）

「小学校、中学校学習指導要領（告示）告示（71年4月改定）
⇒（小46年，中40年改定）

「小学校、中学校学習指導要領（告示）告示（71年4月改定）
⇒（小46年，中40年改定）

「小学校、中学校学習指導要領（告示）告示（71年4月改定）
⇒（小46年，中40年改定）

「小学校、中学校学習指導要領（告示）告示（71年4月改定）
⇒（小46年，中40年改定）

三二一

五、

④

お

は

い

え

う

え

い

う

え

う

もくろく

ひよこ 四
えんそく 十五
いろな 三十

いろな 三十
きしやの 音
みなとの 音
いろな 音

い、ねが 三十六
田うえ 三十六
い、ねが 三十六
おはなし 四十四

おはなし 四十四
みち子さんの 四十四
うちに 四十四
そび 五十七
水 五十七
水てつぼう 五十七
川あそび 五十七
ささぶね 五十七
つき 六十六
先生の 六十六
はるおさんの 七十四
いろ、ろな 七十四
おまわりさん 七十四
みえなく 七十四
とんぼ 七十四

と 八十八
（一） 八十八
（二） 八十八
（三） 八十八
（四） 八十八
（五） 八十八
（六） 八十八
（七） 八十八
（八） 八十八
（九） 八十八
（十） 八十八
（十一） 八十八
（十二） 八十八
（十三） 八十八
（十四） 八十八
（十五） 八十八
（十六） 八十八
（十七） 八十八
（十八） 八十八
（十九） 八十八
（二十） 八十八
（二十一） 八十八
（二十二） 八十八
（二十三） 八十八
（二十四） 八十八
（二十五） 八十八
（二十六） 八十八
（二十七） 八十八
（二十八） 八十八
（二十九） 八十八
（三十） 八十八
（三十一） 八十八
（三十二） 八十八
（三十三） 八十八
（三十四） 八十八
（三十五） 八十八
（三十六） 八十八
（三十七） 八十八
（三十八） 八十八
（三十九） 八十八
（四十） 八十八
（四十一） 八十八
（四十二） 八十八
（四十三） 八十八
（四十四） 八十八
（四十五） 八十八
（四十六） 八十八
（四十七） 八十八
（四十八） 八十八
（四十九） 八十八
（五十） 八十八
（五十一） 八十八
（五十二） 八十八
（五十三） 八十八
（五十四） 八十八
（五十五） 八十八
（五十六） 八十八
（五十七） 八十八
（五十八） 八十八
（五十九） 八十八
（六十） 八十八
（六十一） 八十八
（六十二） 八十八
（六十三） 八十八
（六十四） 八十八
（六十五） 八十八
（六十六） 八十八
（六十七） 八十八
（六十八） 八十八
（六十九） 八十八
（七十） 八十八
（七十一） 八十八
（七十二） 八十八
（七十三） 八十八
（七十四） 八十八
（七十五） 八十八
（七十六） 八十八
（七十七） 八十八
（七十八） 八十八
（七十九） 八十八
（八十） 八十八
（八十一） 八十八
（八十二） 八十八
（八十三） 八十八
（八十四） 八十八
（八十五） 八十八
（八十六） 八十八
（八十七） 八十八
（八十八） 八十八
（八十九） 八十八
（九十） 八十八
（九十一） 八十八
（九十二） 八十八
（九十三） 八十八
（九十四） 八十八
（九十五） 八十八
（九十六） 八十八
（九十七） 八十八
（九十八） 八十八
（九十九） 八十八
（一百） 八十八

59年3月15日

「小学校、中学校学習指導要領（告示）告示（71年4月改定）
⇒（小46年，中40年改定）

「小学校、中学校学習指導要領（告示）告示（71年4月改定）
⇒（小46年，中40年改定）

「小学校、中学校学習指導要領（告示）告示（71年4月改定）
⇒（小46年，中40年改定）

「小学校、中学校学習指導要領（告示）告示（71年4月改定）
⇒（小46年，中40年改定）

「小学校、中学校学習指導要領（告示）告示（71年4月改定）
⇒（小46年，中40年改定）

「小学校、中学校学習指導要領（告示）告示（71年4月改定）
⇒（小46年，中40年改定）

「小学校、中学校学習指導要領（告示）告示（71年4月改定）
⇒（小46年，中40年改定）

「小学校、中学校学習指導要領（告示）告示（71年4月改定）
⇒（小46年，中40年改定）

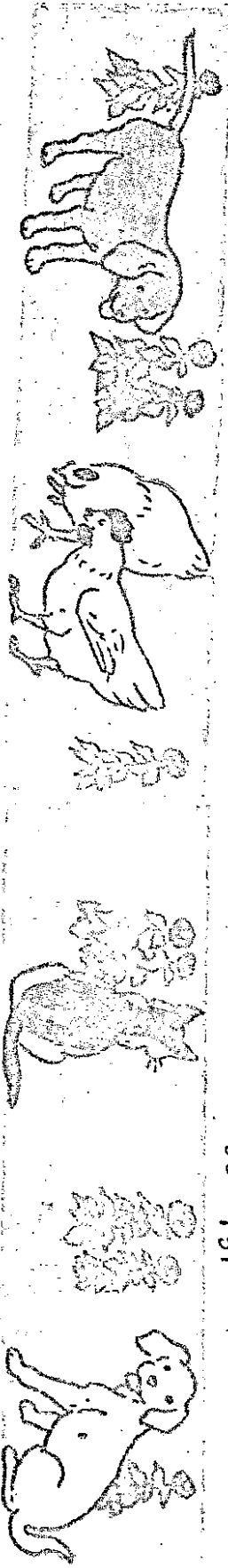
「小学校、中学校学習指導要領（告示）告示（71年4月改定）
⇒（小46年，中40年改定）

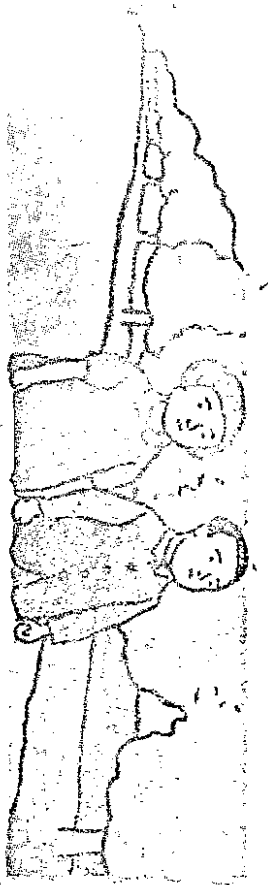
A 680

2-25

21

36~43P



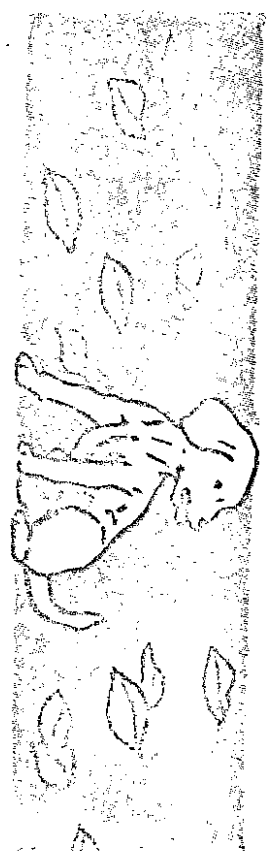


五十おん 百
 べんきょうの 手びき 百十二
 あたらしく 出た おもな ことば 百二十一
 あたらしく 出た かんじ 百二十七

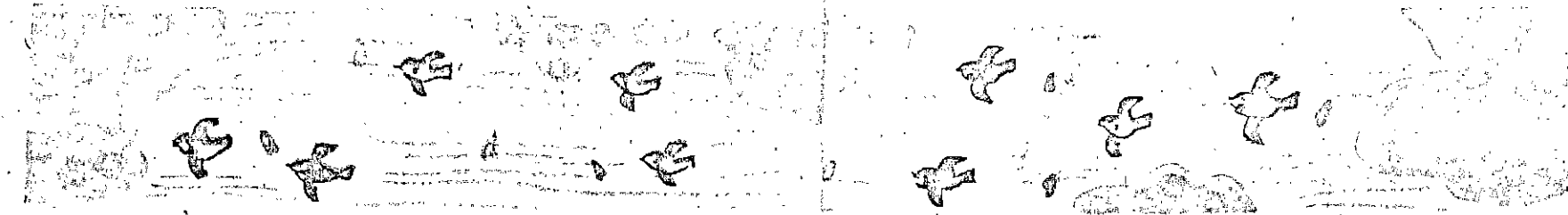
七 ゆき 百五十八
 (一) ゆきが いる
 (二) ゆきの あそび
 (三) ゆきあそび
 八 ゆうびん 百七十八
 (一) かつみ
 (二) ホストから 手がみの とくまで
 九 どうわ 百八十九
 (一) 町の ひ
 (二) 森の 空へ

一 ざかなとり 百四
 せんしやと きしや 百十四
 (一) てんしや
 (二) きしやに のって
 三 きれいに しましやう 百三十四
 ことばあつめ 百四十四
 (一) なかよしのことば
 (二) はんたいの ことば
 五 しやうばう 百四十八
 (一) かじ
 (二) しやうばうしよ
 六 はしらどけい 百五十五
 七 ゆき 百五十八

ちくろく



和
208
の
25
525



もくろく

一 花 四

二 たんじよう日 十三

三 つばめ 二十八

四 ゆきしかさん 三十八

五 ぼくの 作った
おもちゃ 五十三

六 病氣を ふせごう 六十三

(一) はえ

(二) ふどんほし

七 作文 七十一

八 たてもの 七十八

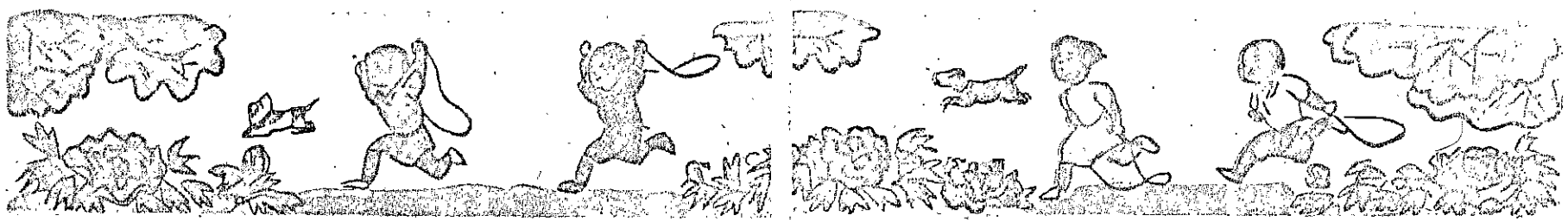
(一) あき地の 家

(二) いろいろの たてもの

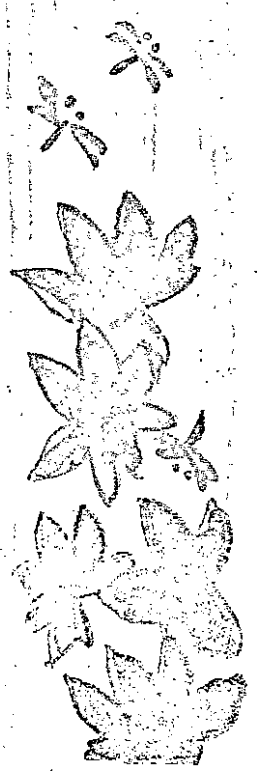
九 水の話 九十五

べんきようの 手びき 百十五

あたらしく 出た おもな
ことば 百二十五
あたらしく 出た かんじ 百二十九



A 680
2-25
3 上

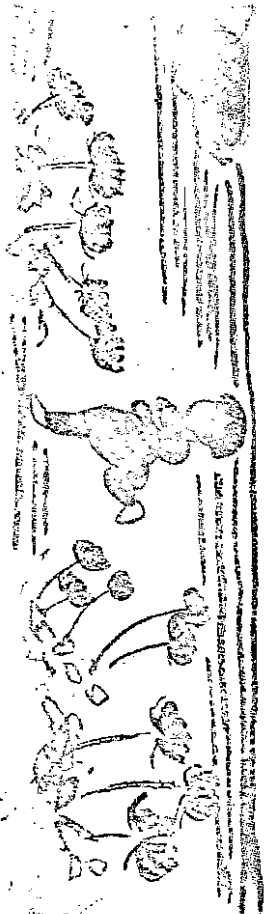
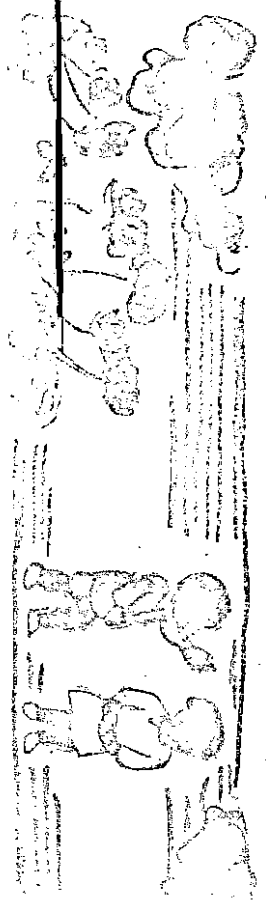


六	一つの	ことばから.....六十五
	(一) 変わる	ことば
	(二) ことばあそび	
七	家ちく	七十二
	(一) おきらさんの	家で
	(二) はるおさんの	家で
八	着物	八十八
九	ふね	百
	(一) ふねの	発見
	(二) コロジアスの	発見
	へんきょうの	手びき.....百十三
	新しく	出た.....百二十二
	新しく	出た.....百二十五

一	空	四
	(一) 雲	
	(二) にじ	
	(三) 空	
二	ラジオ	十一
三	学級文庫	二十二
	(一) 自治会	
	(二) 話し合い	
	(三) 学級文庫	
四	ぼくは	電氣だ.....三十六
五	山の	子ども.....四十六

もくろく

A680
2-25
3 軒



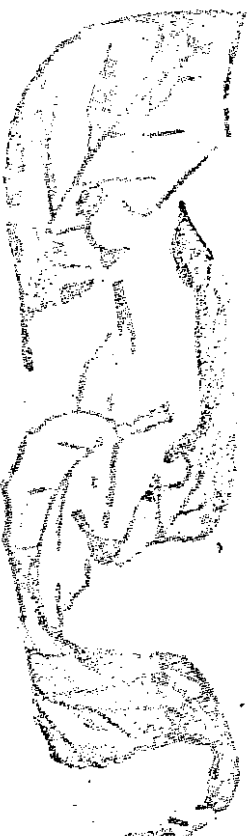
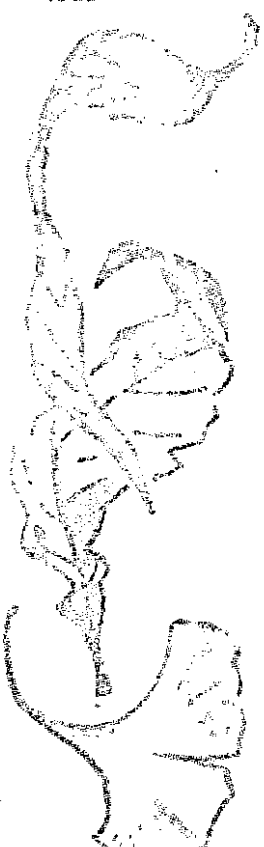
ち ゝ く

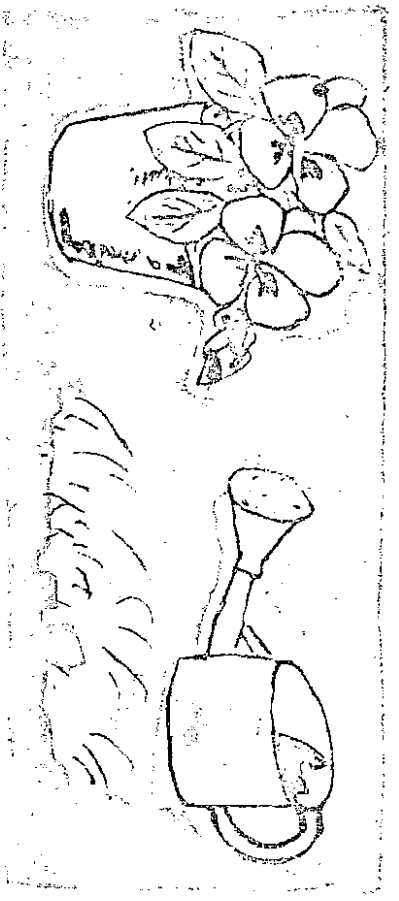
一	春	 四
	(一) 春は花になって	
	(二) 春のおどずれ	
二	明かるい学校	 二十四
	(一) 先生のおみやげ	
	(二) こういふ友だちがいる	
三	楽しい家庭	 四十八
	(一) 母の日	
	(二) しやしんちよう	
四	自然とともに	 六十七
	(一) 川原遊び	
	(二) 山の少年のたより	
五	時計	 七十八
	(一) 古い時計	
	(二) いろいろな時計	
六	注意して見よう	 九十一
	(一) かわったじやがいる	
	(二) 農家の話	
七	夏の生活	 百三
	(一) 林間学校	
	(二) 達さんの日記	
八	むかし話	 百二十五
	(一) きつちよむさん	
	(二) 一本のわら	
	ふるく新しく出た漢字..... 百四十五	
	勉強の手引..... 百四十六	

A 680
2-26
41

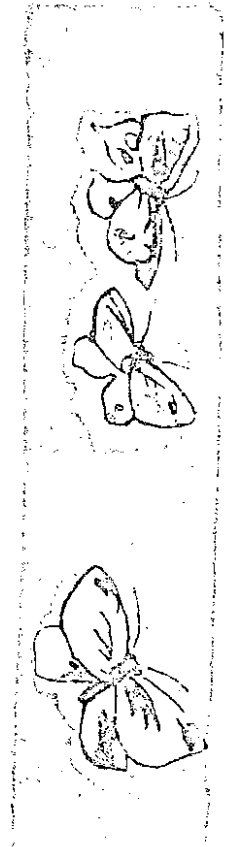
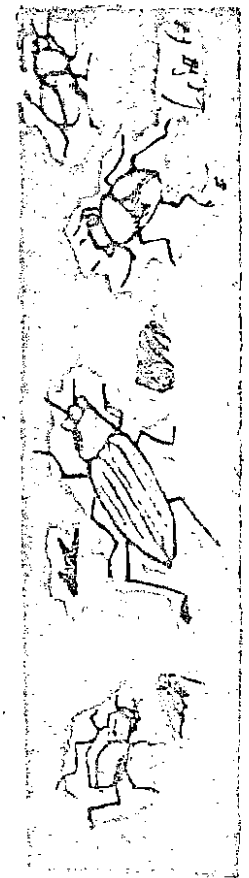


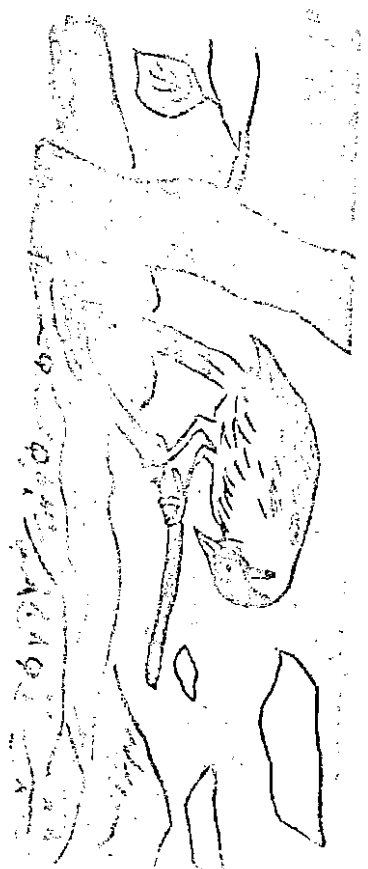
運動会.....四	(一) 百メートル競走	(二) ナザワリ	(三) ダンス	秋の歌.....十三	(一) 秋	(二) 野を歩けば	学綴新聞を作ろう.....十八	学芸会の日.....二十	一	りこうなやくそく	(二) ありの研究	(三) コツノ遊び	汽草.....五十	五	一	狼の島	(二) 狼さんのお話	放送を聞く.....七十二	(一) 子牛救済けき	(二) 放送局の見学	(三) ことばの音	動物の話.....五十五	(一) 動物をつかまえる話	(二) いろいろな動物	わに、だちよう、くろし、よう	じよう おっとせい 犬	ビノチオ.....百二十四	ふるく 新しく出た漢字.....百九十一	勉強のきり.....百九十二
-----------	-------------	----------	---------	------------	-------	-----------	-----------------	--------------	---	----------	-----------	-----------	-----------	---	---	-----	------------	---------------	------------	------------	-----------	--------------	---------------	-------------	----------------	-------------	---------------	----------------------	----------------





一	小鳥の歌	小鳥のちえ	つばめ	心の美しさ	馬車と走る子	まる水小屋のリンカーン	よいからだに育てよう	日曜日の朝	水泳大会	ことばのいろいろ
二	鳥	小鳥の歌	小鳥のちえ	つばめ	心の美しさ	馬車と走る子	まる水小屋のリンカーン	日曜日の朝	水泳大会	ことばのいろいろ
三	鳥	小鳥の歌	小鳥のちえ	つばめ	心の美しさ	馬車と走る子	まる水小屋のリンカーン	日曜日の朝	水泳大会	ことばのいろいろ
四	鳥	小鳥の歌	小鳥のちえ	つばめ	心の美しさ	馬車と走る子	まる水小屋のリンカーン	日曜日の朝	水泳大会	ことばのいろいろ
五	私たちがつなぐもの	ゆう便の始まり	手紙通信	人の力	自然を利用する	電燈の話	かびの働き	助け合い	ふろく	危強の寺引
六	私たちがつなぐもの	ゆう便の始まり	手紙通信	人の力	自然を利用する	電燈の話	かびの働き	助け合い	ふろく	危強の寺引
七	私たちがつなぐもの	ゆう便の始まり	手紙通信	人の力	自然を利用する	電燈の話	かびの働き	助け合い	ふろく	危強の寺引

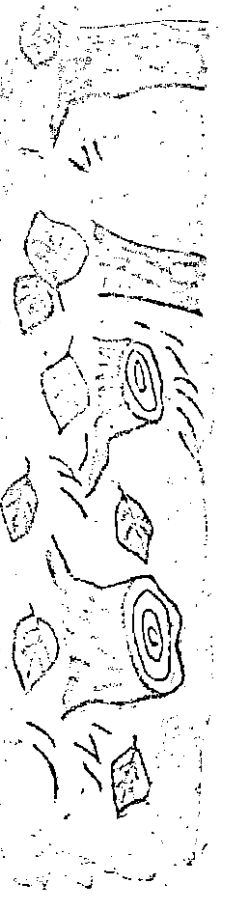
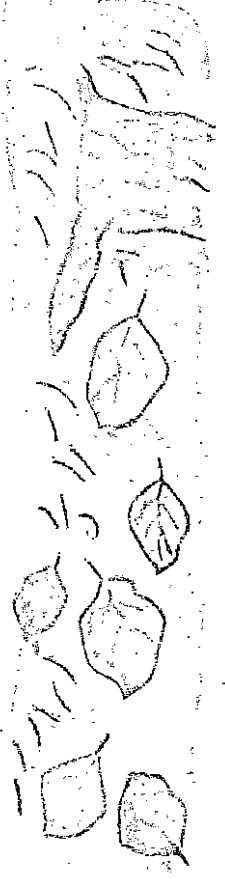


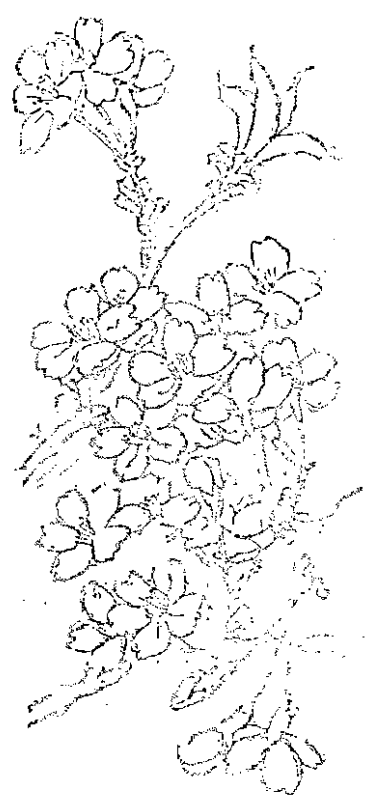


もくじ

一	みんなそろって	大漁 まめ運び 私の日記 炭こうのようすを工場へ	四	雪	あて名のない手紙
二	みんなの橋	三十一	三	発表会	三十二
三	かのはる	三十三	四	雪	六十五
五	本がてきるまで	九十三	六	ことばと文字	百十五
七	小人の国	百三十一	七	ふるく	百五十二 百五十三

A 6880
2-26
5F





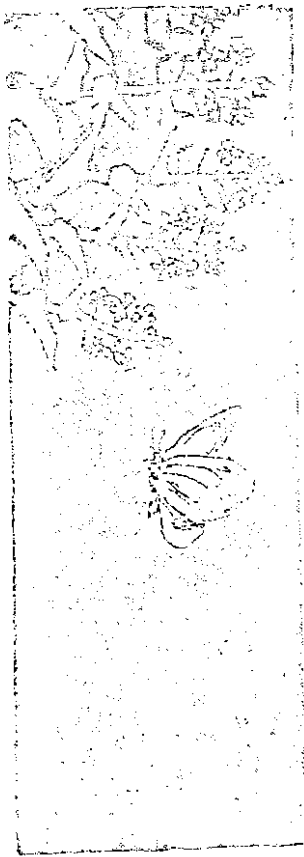
ふるく 鬼雄の手引.....百四十五
新しく出た漢字.....百四十四

人間 (一) ヒトリひとりの人間.....百三十一
(二) 言いわけはいらない
(三) ベスクロツチ
(四) モーソツフルト
(五) 心をつ人々.....九十五

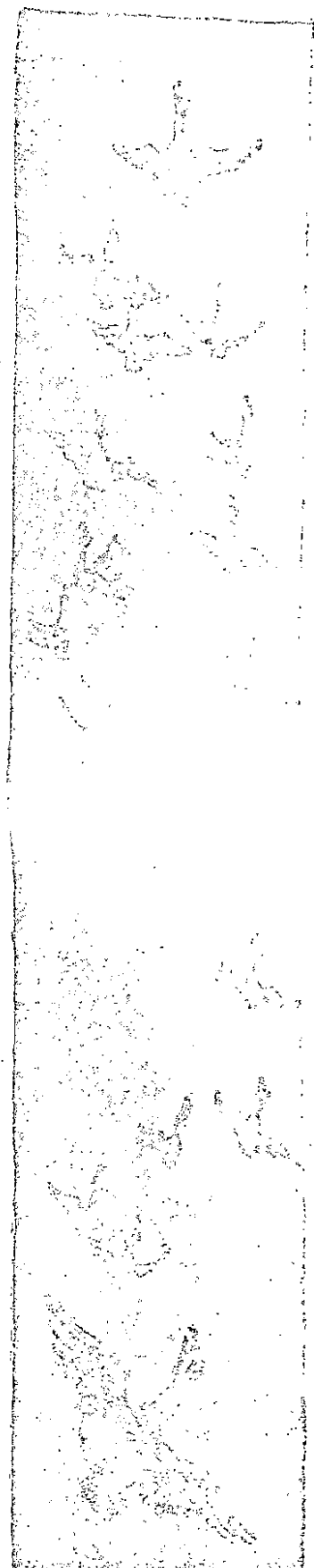
(一) 氷の山
(二) 一本の木からできている森
(三) 高い塔を作るあり
(四) さばく
(五) 死海

風土二題.....四
(一) 炭焼き
(二) 麦ふみ
(三) 土泥を開く.....十三
(一) 山林開拓者の生活
(二) にれの町
スボーツ.....三十四
(一) 校内の野球大会
(二) 友情のメダル
海.....六十一
(一) 郷土の話
(二) 雨水洋にくしを造り
めずらしい話.....七十九

もくろく



東
60
65
825~

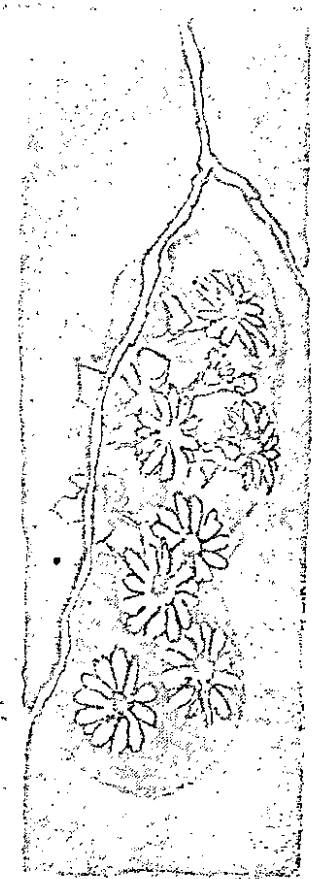
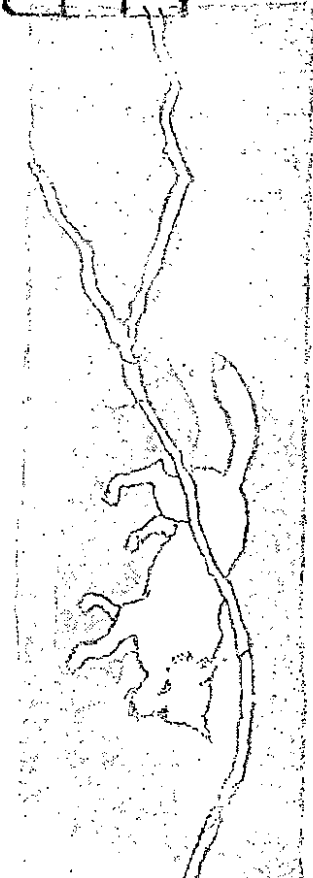


もくろく

一	ふるさとの秋	利根川のせの音	(一)	北國の秋	(二)	小柳	(三)	私たちの図書館	……………二十七
二	私たちの図書館	……………二十七	(一)	私たちの図書館	(二)	昔物の話	作られるまで	……………五十四	紙
三	作られるまで	……………五十四	(一)	茶	(二)	紙			54~63P

四	美しさを求めて……………七十八	(一)	玉虫のずしの物語	(二)	おかぐらのふえ			
五	人間とことば……………百二十三	(一)	方言と標準語	(二)	新しいことばと外来語	(三)	学生のことば	
六	新しい世界……………百三十八	(一)	先生の手紙	(二)	心に太陽を持って	ふろく	新しく出た漢字……………百五十一	砲彈の手引……………百五十二

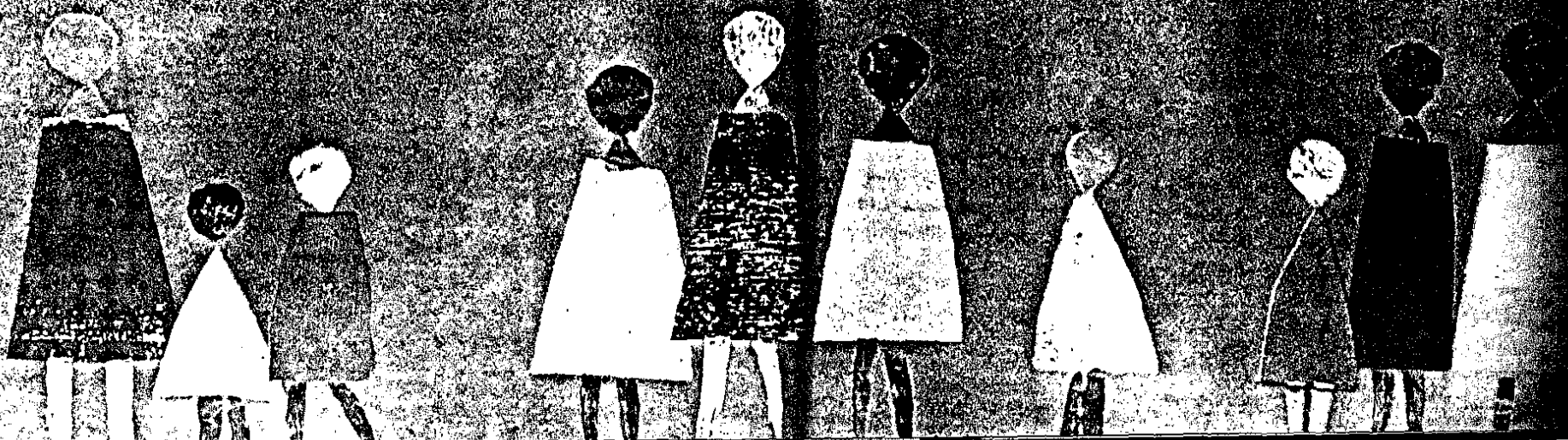
A680
2-25
6P



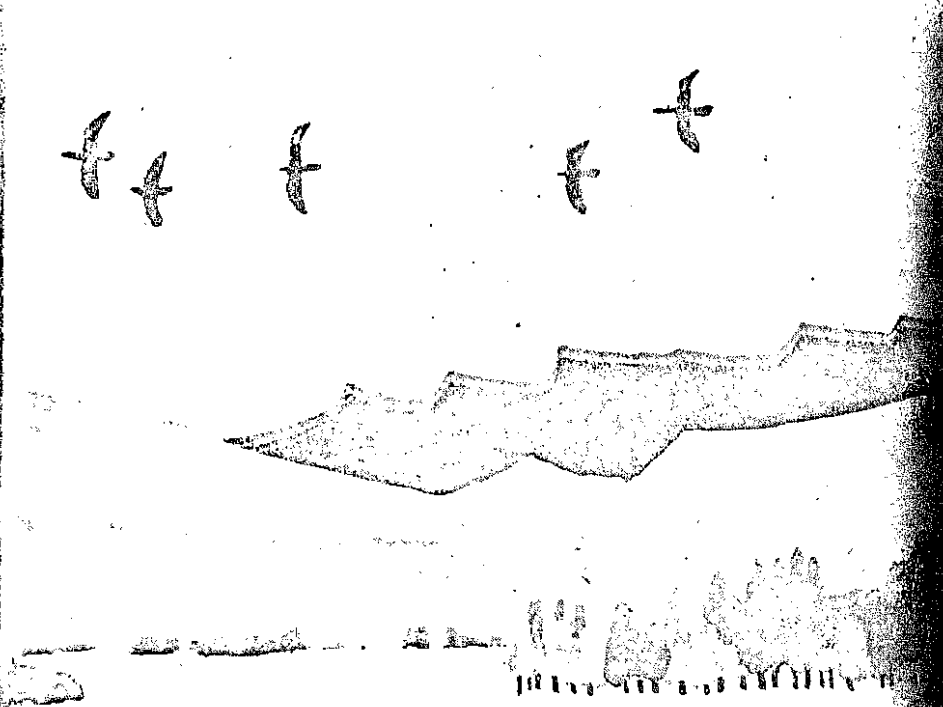
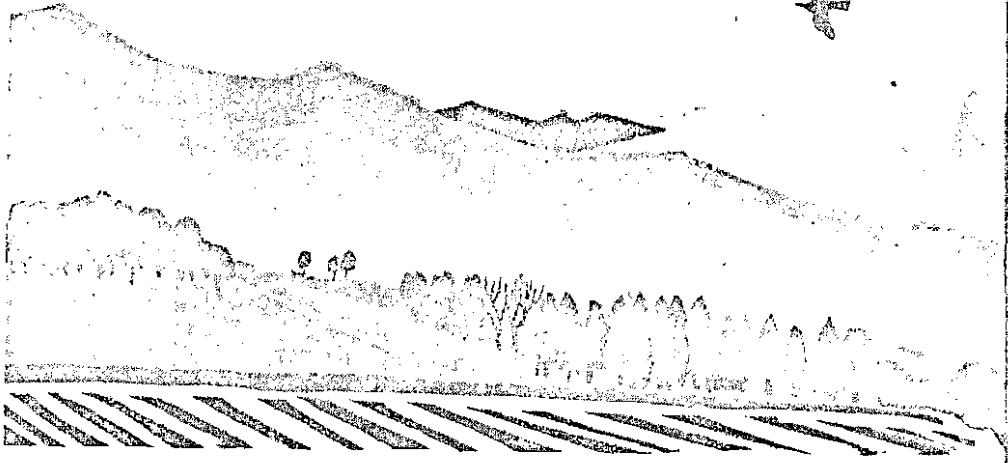
内容一覧表

かんじひょう	117
かたかなの ひょう	116
(三)(二)(一) 虫の なき声	112
(二)(一) 汽車の 音	110
(一) 朝の 音	108
八 いろいろな 音	108
(三)(二)(一) ねこと 小ねずみ	102
(二)(一) ながい はなし	98
(一) 夏休みにした こと	93
七 おはなし会	92
まとめ	91
(二)(一) 先生への てがみ	80
六 夏やすみ	76
(二)(一) 三びきの 子ぶた	62
(一) さわよむどんの うなぎつり	56
五 たのしい 本	56

(四)(三)(二)(一) 草とり	53
(三)(二)(一) 田うえ	48
(二)(一) しるかき	47
(一) たねまき	46
四 田うえ	46
(三)(二)(一) みちあんない	37
(二)(一) にぎやかな とおり	30
(一) えちず	28
三 町	28
(二)(一) しおひがり	21
(一) ひこうじょう	16
二 はれた そら	16
(三)(二)(一) カナリヤ	10
(二)(一) ひよこ	8
(一) 子犬	4
一 かわいい どうぶつ	4



6016
61
576~



もくじ

一 味わって読む 4

(一) すずめの生活 4

俳句 8

(二) 秋の流いき 16

まどめ(漢字の学習・みんなの詩集) 18

ローマ字 4

二 記録をまとめる 20

(一) ひいおじいさん 22

(二) 農村の労働時間 26

(三) 氷のとけかたの研究 31

三 作られるまで 30

(一) えいがの歴史 38

(二) ペニシリンを作りあげた人々 48

ローマ字 5

四 小説 62

大きなしらかば 64

まどめ(ことばの学習) 70

五 みんなで話し合う 80

ガリレイと宗教さいばん 80

六 人間の尊さ 92

(一) 人間の本分 92

(二) ひとりひとりの人間 99

七 きょうげん 106

ほんさん 106

八 広い世界 114

少年使節ローマへ行く 114

新出漢字表 131

当用漢字別表音訓表 132

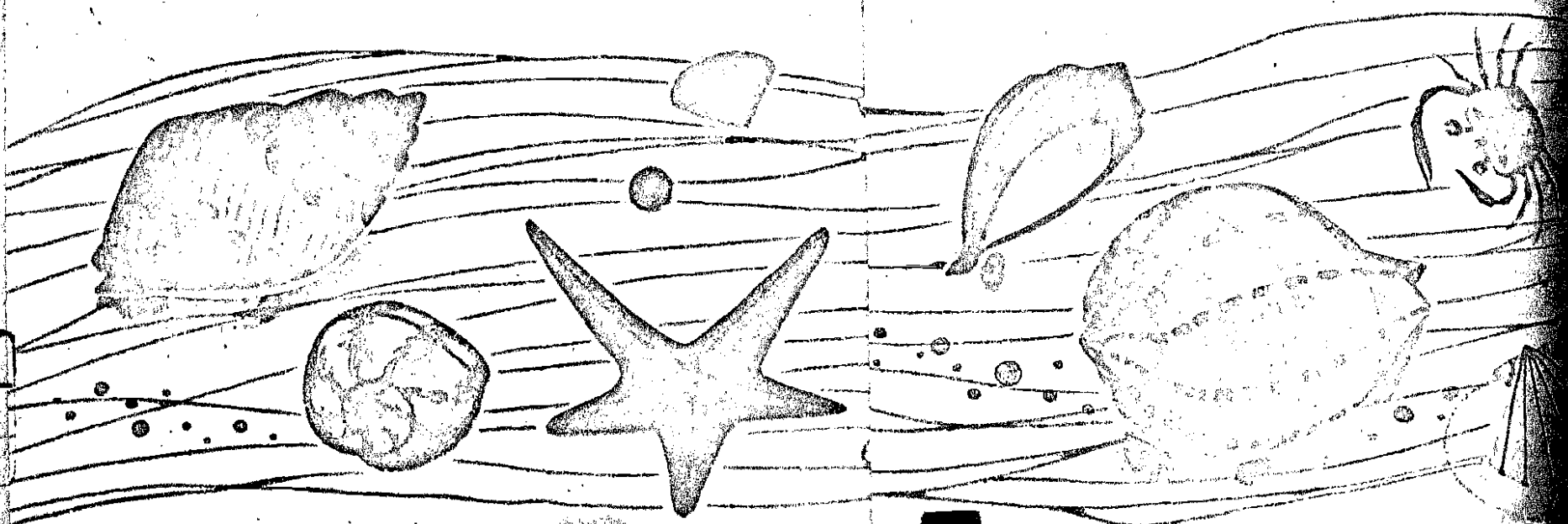
ローマ字資料 142

内容一覧表

A 680
2-36
6

おはなし	三びきの ふな	はつきり はなしましう	がっこうへ いく みちで	しよくいんしつて	ほけんしつて	みちを きかれて	じゆんじよく かきましう	うちから 学校まで	えんそく	水の はなし	たき	田んぼの 水	ふん水	しを よむ	あかちゃん	なみ	麦	表
18	18	20	22	24	28	28	33	40	40	42	44	48	48	50	52	52	52	52

たんじよう会の そうだん	おはなし	いちごつみ	てがみと 日記	てがみ	日記	みんなに しらせたい 夏休みの話	ひろしさんの 話	のぶおさんの 話	せつ子さんの 話	月の かんさつ	作文を 書く	にわとり の せわ	きゆうじよくとうばん	ことばの まとめ	ひらがなの ひよう	かたかなの ひよう	あたらしく てた かんじ	一ねんに てた かんじ
56	56	78	78	83	90	91	94	96	100	108	108	113	119	121	122	123	124	124



A 680
2-40
2上

もくじ

一 どうわを よむ 4

二 だいな 二年生に なった はるおくん
ことをおとさずに 話す 16

三 (一) けっせきとだけ
(二) 道を おしえる
しを よむ 22

四 しやぼん玉
かげぼうし
よく 思い出して じゅんじょよく 書く 26

五 えんそく
せつめいの 文しやうを よむ 34

◆文の かたち 40

◆くわしい いいかた 40

六 どうわを よむ 42

七 いちごつみ
そうだんを する 54

たんじやう会の そうだん

◆声を 出して はつきり いいましよう 59

八 どくしやを しよう 60

花いっぱいに なあれ
絵を 見て お話を 書く 70

九 見た ことや した ことを 書いた
文しやうを よむ 74

◆さして いう ことば 81

十一 このごろ あった ことを 書いて 知らせる 82

うれしかった こと 88

十二 みんなに 知らせる 88

夏休みの 話

(一) ひろしくんの 話
(二) ふみ子さんの 話

十三 よく 聞いて 書く 94

十四 ものがたりを 読む 98

はやとり

ひらがなの ひよう 106

かたかなの ひよう 107

あたらしく 出た かん字 108

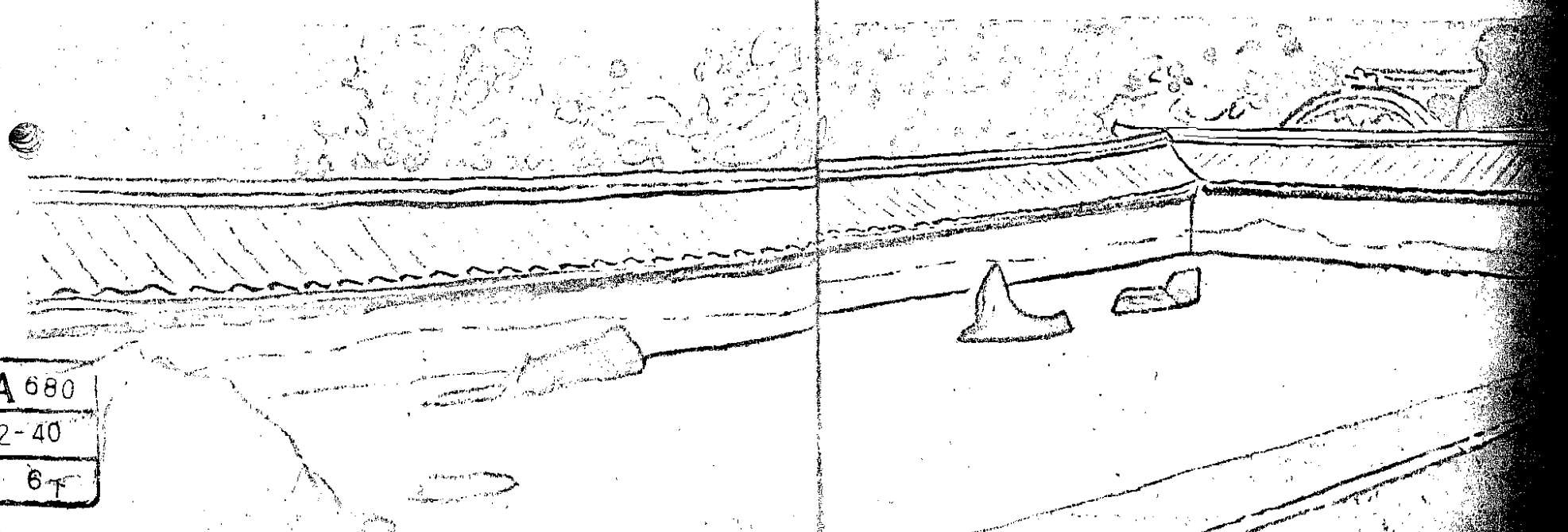
書きじゆん
一年に 出た かん字 109

A 680
2-46
2

6028
57
540~

目次

一 説明文を読む	4
(一) はにわ	4
(二) 正倉院	9
二 研究記録を書く	18
詩「山いも」の研究	
◆ ことばの種類	29
三 伝記を読む	30
二宮尊徳	
四 説明文を読む	48
国語の中のいろいろなことば	
(一) 漢語	48
(二) 外来語	52
(三) 敬語	55
五 話し合いをする	62
「イソップ物語」を読んで	
六 論説文を読む	74
(一) 動物を愛する心	74
(二) 練習と人生	78
七 げきをする	86
狂言 清水	
◆ きやく本を書く	102
八 意見を書く	104
(一) 初めの作文	104
(二) 文章のくふう	106
(三) 書き直した作文	109
九 物語を読む	114
決死の旅	
ローマ字	135
新しく出た漢字	136
教育漢字音訓表	138
ローマ字の表	148



A 680
2-40
6下

昭和 25 年 11 月 10 日

昭和 25 年

207 25

四

い ね

(一)

田 うえ

きょうは ぼくの うちの

田 うえです。おとうとの すすむと

ふたりで、たんぼに おちを は

こびました。

きんじよの おじさんや おはさんたちが

六人 も 手つたに きて にぎやかです。



おじさんたちは 一れつにな

つて、なえを すんすん うえて

いきます。みて いる うちに、

なえが ぎょうぎ よく ならん

て いきます。

「おとうさん、おちをを はこん

て きましたよ。」

すすむと いっしょに 大にえ

て よびました。

「ありがとう。おち、すすむも

きて、入れたのが。」

おとうさんは、そう、いって、

「みなさん、やすみにしましょう。」

と、みんなに、こゑを、かけました。

「さだおさん、まい日、こくろうさんだね。」

となりの、おばさんが、こちらを

むいて、にっこりしました。

むこうの、方から、

「大きな、どじょうを、とって、おいたぞ。」

と、にいさんの、こゑが、しました。かけ

て、いっで、のぞいて、みました。にこっ

た、水の、中に、五六びき、いるようです。

「すいぶん、いるね。」

「わあ、いる、いる。」

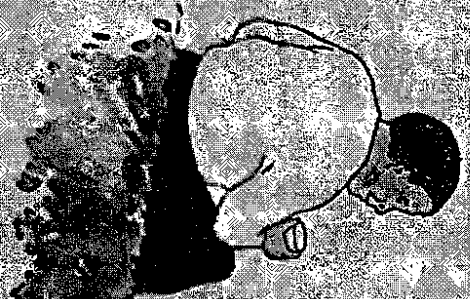
すすむは、大よろこびです。

おとうさんたちは、とてに、こゑを、おろして、ぶち

ぐを、のみなから、はなして、あつて、います。

「ことしは、水が、たくさん、あるので、太だすかりだ。」

「これなら、あしたで、おわりそうだね。」





(二) いねが 大きく
なるまで

なわしろに たねを ま
いて います。たねには
虫の ついて いない よ
い もみを えらびます。
まいて から めが てて、
なえに なるには 四十日
くらい かります。

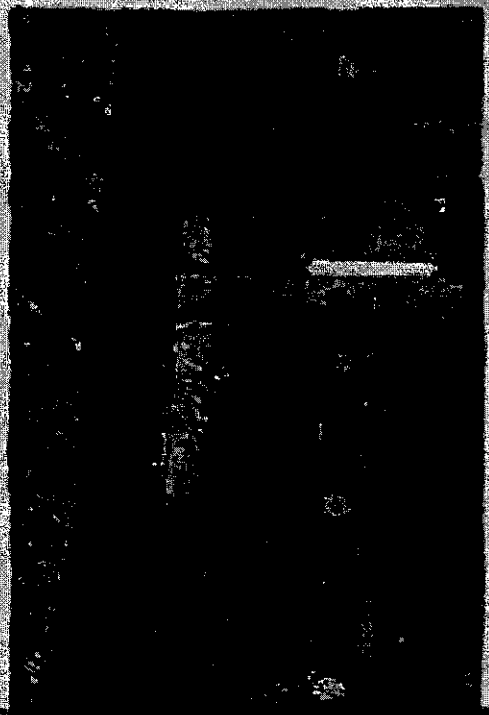


田うえをする まえに
いろ いろ にゆんぴをし
ます。すきがえした 田に
水を入れます。それから
うまか うしを つかて
ならします。この ならす
のを しるかきと いま
す。
しろかきが すむと い
よいよ 田うえます。



うえつけられた なえは
くんくん そだつて いき
ます。くさも どんどん
のびるので なんべんも
くさを とります。
あつ い 田に たらされ
て くさを とる ことは、
なかなか ほねの おれる
しごとです。

- 42 -



よるに なるど 田の
ところどころに ゆうがと
うを とめます。
いねに つく わるい
虫を よびよせて ころす。
のです。
よるの 田は、あちら
こちらに あかりが みえ
て 大へん きれいです。

- 43 -

一 風土二題

(一) 炭焼き

山ふところの村で、一番初めに春を知らせるのはなだれの音だ。寒さが次第にゆるんでくると、日なたの山の雪が、すさまじい音をたてて谷底へなだれ落ちる。なだれのあとには、きつね色の山はだがまぶしそうにのぞいている。長い冬のねむりからさめたのだ。つづいて、谷の流れが歌い始める。雪どけの水が、ねこやなぎやふきのとうの芽ぐも岸を、

「おはよう、春ですよ。」



と、ささやきながら通って行く。うぐいすは声ならしに鳴いてみるが、なにしろ、長い冬の間にだまりこくっていたので、すくには満足にさえずることができない。そこで、何べんも何べんもやり直して、次第にじょうずになっていく。林の木々はすべてに目をさまして、いる。炭に焼くならやくぬぎは、芽が出ると、木がやわらかくなって炭の火もちが悪くなる

から、早く切りたおしておかなければならない。のこぎりで、直けい三十センチくらいの幹をひいていくと、白いのこぎりで、がぼっかりと青くのぞいてゐる。たおれた木のえだや幹を、四五十センチの長さに切つてたばねておく。それを炭がまの所へ運んで、中に積むと、かまどの口をふさいで小さい火口から火を入れる。炭がまの中の生木は、火の力で、水じょう気をしきりにえんとつからはいてゐるうちに、火がまわつて、はいにならず炭に生まれ変わつていく。木を、はいにするか炭にするか、火力

のほんのちよつとした差がわかれぬのだ。それを、炭焼く人は夜もねむらずに、火の色と音と、けむりの色とにおいて火かげんをする。長い炭焼きの「かんてり」ばな炭が焼けるのであるが、もしもそのすばらしく発達した「かんてり」に科学の力を加えたならば、どんなに「つばな炭が焼けることだらう。

ずつと山のおくでは、まつやすぎやひのきの材木を、そりのような形のきんま(木馬)にのせて運び出している。道一面に小さい木をしきつめた土を、きんまをす



べらせて、曲がりかどや坂をたくみにかじをとって行く。きん
まと道の木とがすれて、キイキイときしる。まさつてけむりが
出る。静かな谷の向こうからも、キイキイとこだまが返って来



る。うぐいすもだいぶじ
ようずになつて、きんま
のきしりに答えてホウホ
ケキヨと鳴く。一休みし
ているきんま引きのおじ
さんも、
「ホウホケキヨ」
と、あせをぬぐいながら
口ぶえをふいた。

(二) 麦ふみ

青々と七センチあまりのびた麦を、横向きになつてふんで行
くと、つややかな麦の葉先が、一様に左へたおれていく。

「せつかくのびたのに、麦がかわいそうね」
と、みち子は言った。

ほかむりをした父は、となりのうねで、こしに手を組んで
麦をふみながらわらつて言った。

「麦には、これがごちそうなのだよ。こうしてふんでやると、
麦が強くなつてぶんげつ(かぶわけ)が多くなる上に、しもで土
が持ち上がつてたおれるようなことがなくなるから、麦ふみ
をすると実りがよくなるのだよ。人間でも、あまりからだを

大切にしすぎると、ほら、『うどの大木』といって、なまぐらになつてしまふのと同じことさ。

青空に、ふうわりと春らしい雲がういて、たんぽの上がかすんでひばりがしきりに鳴いている。はるかな山脈にはまだ雪が光って、コバルト色の山ふところから、炭を焼くけむりがのどかに上っている。

ふと、そばの小川の流れを、静かにささぶねがういて行くのを見つけたみち子は、麦うねから飛び出して拾い上げた。ささぶねにはすみれの花がのせてあった。上流のだれかが流したものだろ。み



ち子は、岸のきんぼうげの花を取つてのせた。そつと水にうかべると、前よりも重くなつて、ささぶねのふちが水にしずみそうになつた。

こんどはだれが拾うだろう。みち子は、川下の友だちの顔を思いうかべた。

大田先生が自転車に乗って来られた。ハンドルにうめのえだがつけてある。

「先生、こんにちは。」



とおじぎをした。先生は、

「お精が出ますね。」

と、ぼうしのひさしに手をかけたとたんに、運転を誤ってあやうくたおれそうになった。

「おっと、あぶない。」

と、急いでハンドルを左右に動かして重心を取りもどし、うめの花を散らして走って行った。

気が付いてみると、みち子も、麦うねからはずれた所をふんでいた。

二 土地を開く

(一) 山林開拓者の生活

開拓地は、駅から八十キロもはなれた山の中にある。新一が母や妹のよし子といっしょに、遠い町から来て汽車をおりると、父が馬車で出むかえに来ていた。父は一年前からこの開拓地へ来て、土地を開いていたのだ。

「やあ、みんな元気だね。新一もよし子も、一年会わないうる間に、すっかり大きくなったね。さあ、この馬車に乗って行くんだよ。」

と、父はにこにこして言った。みんなが馬車に乗ると、馬は勢



いよく走り始めた。馬の首に付け
たすが、シヤンシヤンとにぎや
かに鳴る。馬の鼻からは息がま
っ白に見える。

やがて、馬車はなだらかな高原
に出た。雪がまだうすく残って

て、あたりは一面の銀世界だ。ど
こまで行っても、同じ所にと

して、いるような気がする。新一は
今まで往んでいた町の雪は、もう

二週間も前にすっかり消えてしま
ったのにと、びっくりした。住み

なれた町や、友だちのことがなつかしく思い出されて、なんと
なく心細くなってきた。よし子も心細いのか、母にきつかりつ
かまっつて、なきそような顔をしている。新一は歌を歌い始めた。
心細い気持ちを追いはらうつもりで、できるだけ木きな声で元氣
よく歌った。よし子の顔も母の顔も、その歌にはげまされたよ
うにだんだん明るくなる。新一は、馬までが、歌に調子を
合わせて走っているようだ。

開拓地は、ぶなやまつやならなどの木のおいしげった。昼で
もうす暗いような林であつた。馬車は林のはずれで止まつた。
開拓村は、この林のはずれにあるのだ。新一は、元氣よく馬車
を飛ばつた。今までなきそような顔をしていたよし子も、急に
元氣づいて新一のあとから飛びおりました。

村には、家が全部で三十七戸ある。どの家もみんな、そまっ
なかり小屋みたいな家ばかりだ。その中の一軒の小屋に、新
一たちはこれから住むのだ。

小屋にはいると、まず、いろりに火をたいた。

「今はまだこんなに小さな家だけれど、そのうちに、もっと大
きくするつもりだよ。」

と、父はみんなの顔を見回して言った。

「この辺には、くまは出ないの。」

新一はたずねた。

「むかしはだいぶ出たそうだが、近ごろはさっぱり出ない。お
とうさんはここへ来てから、まだ一度もくまが出たという話
を聞かないよ。」

「もし出たら、ぼく、生けどりにするんだ。」

新一が目をかがやかせてそう言うど、父は、

「ほう、新一は、町で育った子にしてはなかなか元気がいいぞ。
やっぱり開拓者の子だなあ。」

と、心からうれしそうに言った。

父は、毎日林へ木を切りに出かける。まず、木の根もとにお
のを入れておいて、反対側からのこぎりでひくのだ。三十七戸
がみんなそろっての共同作業だから、木を切る音が林じゅうに
こだまして、まるで林全体が楽しい歌でも歌っているようだ。
新一も、ためしに父ののこぎりでひいてみた。とても力がある。
顔をまっかにして力いっぱいひくと、白いのこぎりくずがこぼ
れて、ぶうんと木のにおいがあたりにただよう。やがて木は、

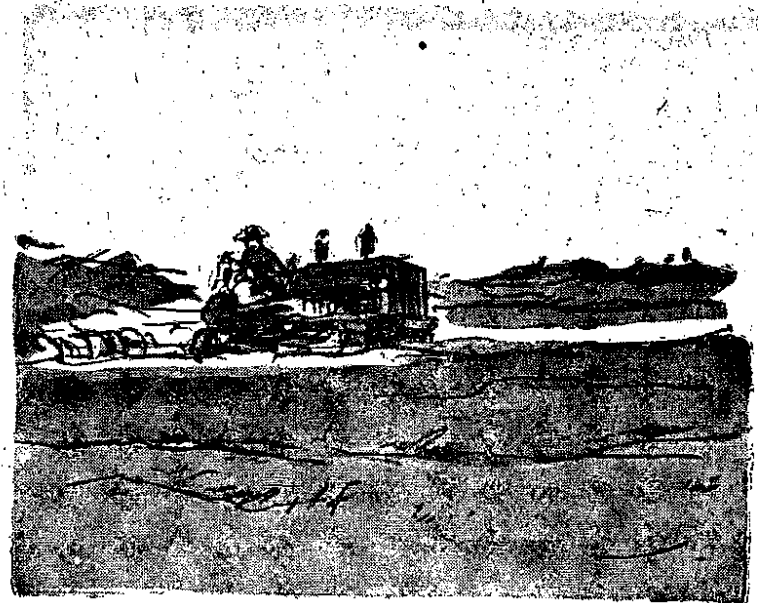
メリメリと音をたてて、どっとたおれる。こうして、一本また一本と、木を切りたおすたびに、開拓地がひろがっていくのはゆかいだ。

春が深くなるにつれて、高原の雪は次第に消えていく。あたたかい地方では、もうさくらの花も散ってしまったところだろう。開拓地はだんだんいそがしくなってきた。切りたおした木をかたづけ、トラクターで根を引きぬいてしまおうと、こんどは、これから開拓する土地に火をつけて燃やすのだ。火は、初めのうちはなかなか燃えつかないが、一度燃えつくと見る見るうちにひろがって、一面火の海になる。まっかに燃えている火の海の向こうに、雪を着た高い山々が白く連なっているのは、なんとも言えない美しい景色だ。ああいう高い山の雪は、七月ごろまで消えないのであるのだと聞いて、新一はおどろいた。

すさまじい音をたてていく日も燃え続くと、赤い火の海は白いはいの原に変わってしまった。あとはどこどころから、ブスブスとけむりがくすぶり上っているばかりだ。いよいよ開拓だ。

トラクターが引くすきで、土地を深くすき返し始める。長い長い間木の世界だった土が、いま、すき返されて、初めて目の見るのだ。すき返された土からは、かすかに水じょう気が立ち上って、なにかほのかなにおいがただよっている。

新一は、トラクターの運転台に乗せてもらった。ずっと前には、開拓地はくわで開いていたものだったが、トラクターを使うようになってからは一台で何百人分かの仕事



ができるので、とても楽に開拓できるようになったのだよ。と、運転のおじさんが話してくれた。

「ほら、君も運転してごらん」と言いながら、おじさんは新一の手を取って、ハンドルの回し方を教えてくれた。教えられたとおりに新一が思いきってハンドルを回すと、小山のような重い鉄のトラクターは、方向を変えてスピードを出した。新一は、早くトラクターの運転が、自由自在にできるようになりたいと思

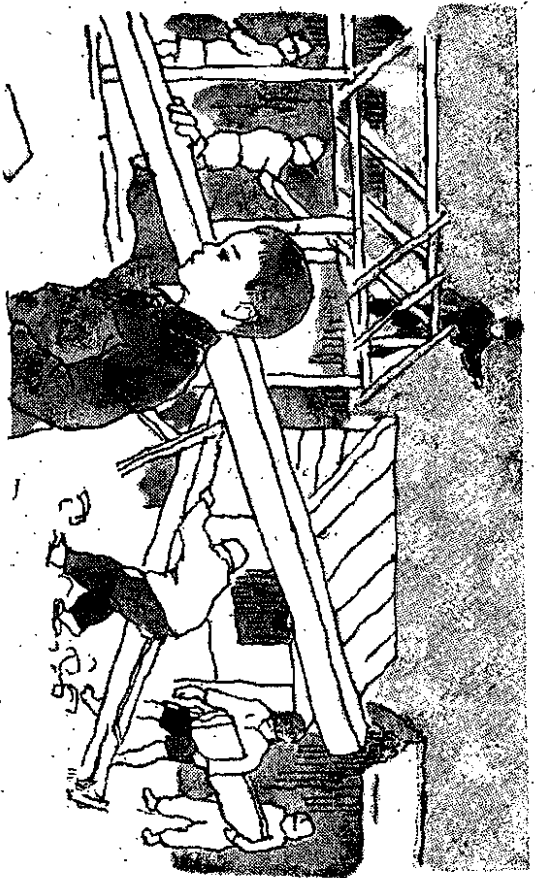
った。

すき返したあとは、さらに土を細かくだいてよくならしから、土地に適した食物の種をまく。この開拓地は、土地が高くていねは作れないので、いねの代わりにじゃがいもや、ら

い麦や、そばなどを作るのだそうだ。
開拓村のうらには、きれいな谷川がさらさらと流れていて、その流れの近くに、ホルスタイン種の牛がかってある。村の女の

人たちが、毎日世話をしたり、ちちをしぼったりしている。しぼりたての牛にゆうはすばらしくおいしいので、子供もおとなも、開拓村の人はみんな大すきだ。また、その牛にゆうから作るバターやチーズは、遠い町まで売り出されている。
村の子供たちはおとなに負けずに、共同でにわとりとうさぎ

をかっている。新一とよし子も、そのなかまに入れてもらった。にわとりは、ホワイト・レグホンが二十はいたのが、新一がなかま入りして間もなく、ひよこが二十五わかえったので、全部で四十五わになった。うさぎは、今十六びきいるが、これもそのうちにずっとふえるだらう。それまでに、小屋をもっと大きくくしておいてやらないうと、はいりきらなくなりそうだ。新一たちはみんなて相談して、新しい小屋を建てることになった。おとなたちの手をかりないで、子供だけでいっしょうけんめいにちえをしぼって設計図をかき、それぞれの仕事をわり当てた。木を運ぶ者、その木を適当に切ったりけずったりする者、土地をならす者、柱を立てて屋根を作る者、かきを作る者など、みんなむちゅうになつて働いたので、仕事は思つたよりも早く



はかどつた。新しい小屋は、十二メートルに三メートルの長方形で、屋根が二メートルの高さ、南向きになっている。小屋の中をしきつてうさぎを入れ、にわとりの運動場も作つてやつた。古い小屋から解放されたうさぎやにわとりは、広い清潔な小屋にひっこすと、しばらくの間おどろいてきまともにしていたが、やがて、うれしそうに元気よく遊び始めた。いろいろな世話は、みんなかわる

がわる当番を決めてすることにしたが、だれも早く自分の順番がこないかと待ち遠しがるほどだ。にわとりのたまごは、三十
七戸に公平に分けた。新一は、町にいたころ食べたどのたまご
よりも、自分たちでかっているにわとりのたまごの方が、ずっ
とおいしいと思つた。
もう、耕地には緑の芽が黒い土をおしのけて顔を出し、太陽
の光をあびてすくすくと育っている。
本当に、ここがあのこんもりしげった森だったのだろうか、
なんだかゆめのようだ。新一は開拓の喜びを、心の底からしみ
じみと味わつた。そして、これから開かれていく山林をながめ
ながら、すんだ空気をむねいっばいすいこんだ。

(二) にれの町

見わたすかぎりのさき原や、
ぬまや、しつ地や、林の中に、
高いにれの木が一本あつた。
春になると、芽をふいた。
それから小さいきらきら光る青葉が
いっぱい出た。
葉が重なり合うと、
さき原の上に美しいかげがてきた。
夏の暑い日ざかりに、
うさぎの親子がその下に来て休んだ。



三 作られるまで

(一) 茶

なだらかなおか茶畑から、のどかな茶つみ歌が聞えてくる。赤いたすきに赤い前かけ、ま新しい手ぬぐいをかぶったむすめさんたちが、茶つみかごを首にかけて、茶の芽をつみながら、歌っているのだ。むかしながらののどかな茶つみ歌も、まだ少しは残っているが、それでは、茶をつむ仕事はかどらないというので、

近ごろは調子の早い、はやい歌が歌われるようになった。茶をつむのも、今までは、いちいち手でつんでいたが、そうしてはのろいから、チヨキチヨキはさみてつむようになった所もある。のどかそのものと思われていた茶つみも、こうして時代の進むにつれて、何よりも能率が大切に思われるようになり、仕事を早くするためのくふうがこらされるようになった。

茶で有名な宇治あたりでは、茶つみ女は、その土地の人もかなりいるが、たい



ていは近くの国々から、農閑期を利用して、やって来るのが多い。こうした女たちには、その年の茶の芽をつまないと、年が送れないというような、茶つみのすきな人が多い。立春から数えて八十八日目の、いわゆる八十八夜ごろになると、こうした女たちが、着がえを入れた大きなふろしき包みをせおって、宇治の里へはいつて来る。

女たちはたいてい一日に六七キロの茶をつむが、じょうずな者になると、二十キロ近くもつむそうだ。ぎよくろなどの上等の茶になると、新芽の中の三つ葉だけをつむのであるから、なかなか手間がかかる。



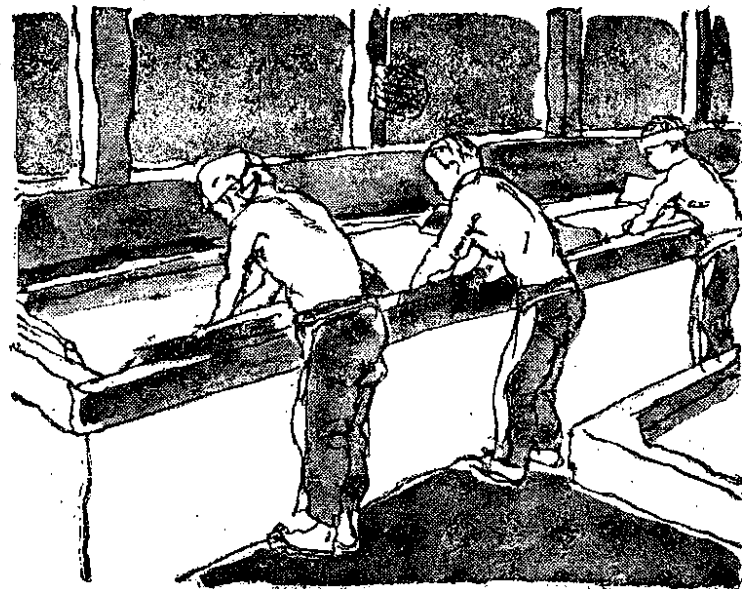
ぎよくろといっても、別に茶の木が変わっているのではない。ただ、芽が出る時の手当てがちがうだけなのである。ぎよくろの茶畑は、新芽の出る少し前から、しもよけ、日よけのおおいがよしずとわらで作られる。こうしてしもにあたらず、直しや日光をのがれた新芽は、やわらかい青々とした色になり、なんともいえぬぎよくろ特有のあまい味を持つようになるのである。しかし茶の木この樹齡こによって、茶の品種はすっかりちがってくる。宇治のぎよくろなどは、樹齡百年前後のものが多く、二百年ほどたったものもある。これくらいの老樹に

なると、その茶の味も舌にやわらかで、実にさわやかな、なんともいえないかおりを持っているといわれる。

こうしてつまれた青茶は、ほいろ師の手にわたされる。ほいろ師は、直接茶に火があたらないよう、また茶が火のにおいがないように、炭火を入れたほいろの上にこもわらをかけ、鉄ぼうやあじろをのせ、その上にさらに、木わくの中に厚い紙を張った助炭というものをのせて、その中で、手で茶をもむのである。ふつうの茶は、およそ三時間ぐらいいもめばよいのであるが、ぎよくろは一日じゅう休む間なしにもまなければならぬ。茶独特の高いかおりを残すのも、あざやかな色を出すのも、この間の手もみの仕方一つによるわけである。この三時間のこつによって、茶が生きたり、無茶苦茶になったりする。だから、

ほいろ師の苦勞もひととおりではない。たとえば、うす茶のほいろ場などは、赤道直下そのままの暑さで、はだかでもいいからだじゅうからじりじりとあせがしたたるほどである。しかもこの地ごくのような暑さの中で一秒二秒を争うようにして、急いでもまなければならぬのである。

もみあがった茶は、むしろの上にまんべんなくひろげてかわかす。こうしてかわかしたのがあら茶で、古葉や黄葉やくきな



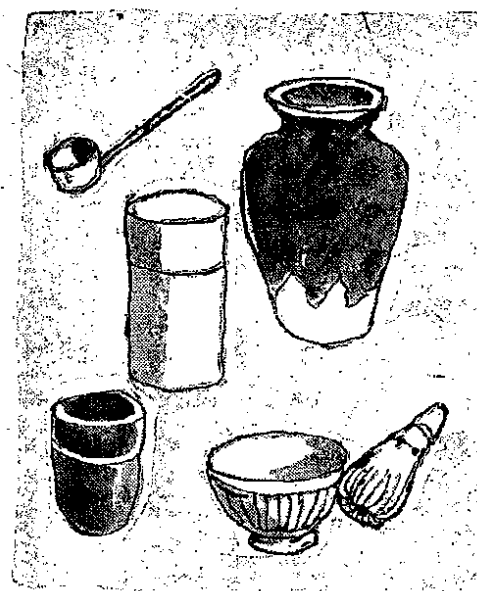
どが交っているから、それらをいちいちより出すのである。こうして初めてひととおりのお茶になる。これをさらに木うすに入れて、適當の長さに切断し、用意の紙ぶくろに入れて、町に売り出すのである。こんなにも手数をかけてできあがった茶は、ほんのわずかで、ぎよくろなどは、四キロの生葉が、もまれて一キロにちぢまり、さらに精選されて六百グラムぐらいになつてしまうのである。

このようなほいろ師の手もみでは、のろくて大量生産ができないからというので、近年手もみに変わらぬすぐれた製茶機械が利用されるようになり、ほいろ師は年々追われて、機械工業が手工業にとって代わるようになった。しかし、ぎよくろのような高級なものになると、機械ではどうしてもよい味とかおり

のものができないので、今でもやはり、むかしながらのほいろ師の手もみでやっている所もある。

だいたい、茶には緑茶とウーロン茶と紅茶こうちゃの三種類があり、緑茶の中にも、せん茶、ぎよくろ、うす茶、ぎよく緑茶、番茶などがある。時代の現われというのであろうか、近年はぎよくろの需要が少なくなり、うす茶の需要が多くなってきた。もともとぎよくろは、北海道や北陸などの寒い土地と、東京都でもに消費されていたものであるが、めまぐるしく動く時代の速度は、さすがにおちついて、ごく少量のぎよくろを味わうのんびりした気分を許さなくなったのであろう。

しかし、コーヒートや紅茶のあっぱくはほとんど受けることなく、むしろす茶から作られた新種類のものは、夏季の清りよ

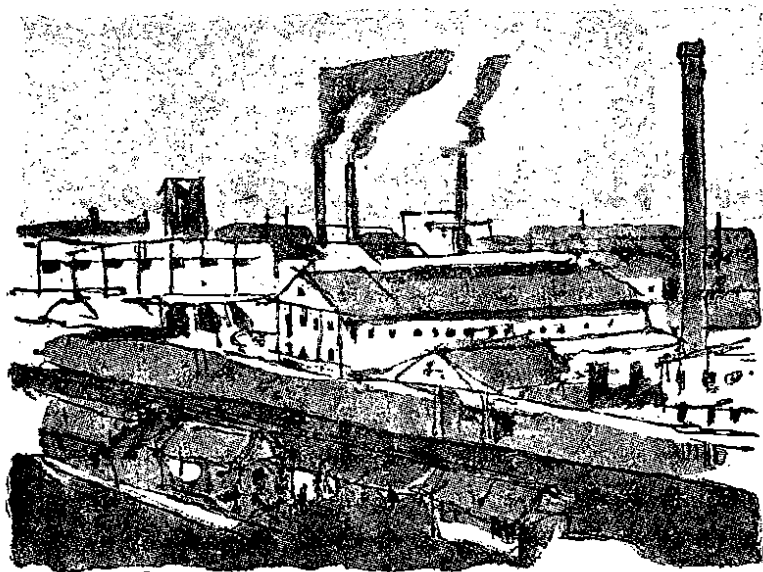


う飲料用として、紅茶などよりも喜ばれ、そのさわやかな色と
 かおりによって、海外まで進出している。茶にふくまれるテー
 ン(カヘイン)、ビタミンA、Cが、薬学的にききめがあるという
 ことが発見されてから、うす茶はますますふえてきて、うす茶
 応用のアイスクリームやチューインガム、チョコレートなどま
 て作られるようになっていいる。
 茶といえば、むかしから宇治
 が本場のようになわれているが、
 静岡県でも大量に作っている。
 茶は、日本の貿易の輸出面を
 代表する重要な選手のひとりで
 ある。

(二) 紙

ぼくたちは、本の用紙がどう
 して作られるかを見学するため
 に、ある日、先生にお願いして、
 製紙工場に連れて行ってもらっ
 た。

電車をおりると、すぐ、大き
 なえんとつが見えて、その下に
 工場の建物がならんでいた。朝
 の工場地帯はひっそりしている。
 駅から五分ほど歩いて製紙工場に着いた。



船 36年 6年Ⅱ
新しい国語
おじ いる て、東京

「今ではだいふんにぎやかになりました。この大きなくすのきを見てみると、遠いむかしのようにすが目の前にうかんで、見たこともないひいおじいさんが、元気で現われてきそうに思われます。」

農村の労働時間

社会科学で、「農村の生活」について
研究した時、わたしたち二人は、
「農村の労働時間」について調査した。
まず、わたしたちは、

- (1) 農村の人々は、一年間、月別に、どんな仕事をするか。

平均時間働くか。

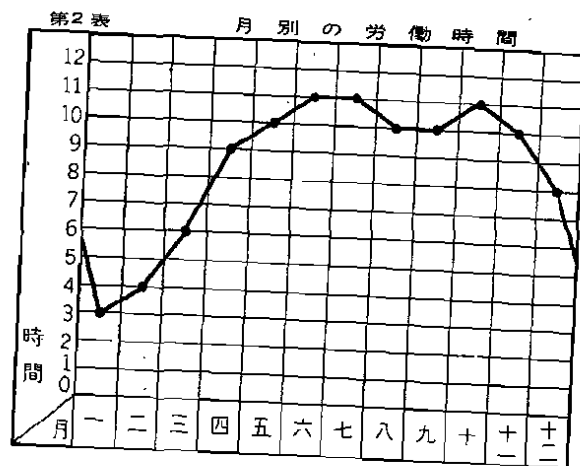
の二つの点について調べた。

- (1) 一年間の月別の仕事

農村では、一年間に、どんな仕事を
するか。このことは、村の農家十けん
をばらばらに選り出して、作物など
田畑の耕作を中心にして調べた。それ
をまとめたのが、第一表である。

- (2) 月別の毎日の平均労働時間

月別の毎日の平均労働時間については、農協の事務所で調べた。それをグラフにしたのが、第二表である。



農家

グラフ

第1表 農 村 の 仕 事

米													
麦													
ばれいしょ													
さつまいも													
ごぼう													
だいこん													
かぶ													
さといも													
だいず													
キャベツ													
ねぎ													
なす													
トマト													
かぼちゃ													
たばこ													
とうもろこし													
わら仕事													
冬のたくわえ													
月	一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	

備考 ○は植まき ●は収刈 ×はなえつけ —は作物が続いて作られていることを表わしている。

農村・労働時間

月列

第3表 牛や馬は人の何倍働くか

	平均	収かく	草取り	種まき	土をく	畑を耕す
人	1	1	1	1	1	1
牛	約8	6	8	10	10	5
馬	約10	8	10	12	12	6

ちくさん課で発表しているものである。これによ
ると、牛は人の約八倍、馬は人の約十倍もの仕事
をしていることがわかる。馬や牛を使えば、それ
だけ仕事の能率が上がる。それで、かちくを使っ
ている農家のほうが、そうでない農家よりも、平
均して、労働時間が少なくてもよいのだらう。そ
れに、かちくを使っている農家のほうが、たいて
い広い田畑を耕作して、収かくもずっと多く、

農作業のてつだいをするのである。
このような調査をしているうちに、わたしたちは、馬や牛を使ってい
る農家のほうが、平均して、労働時間の短いことに気がついた。そこで、
次に、かちくの労働力について調べてみた。第三表がそれである。県の

農はん期
大麦
小麦
なえつけ
だっ穀
農作業
主婦
家事
賃やす
人手
ので、老人や子どもまでが働いている。あかんほうのせわや家事や怪い
んなものになるだらう。それでも、六、七、十月には、人手が足りない
ない。これらの労働時間を合わせると、農家の人の労働時間は、たいへ
作物を売りに行く仕事や、主婦の家事に費やす労働時間は、はいてい
ところ、これは、農家の収入のもとになる農作業だけの労働時間で、
期の前後、五、八、九、十一月は、平均十時間の労働である。
なっている。労働時間は、平均十一時間である。また、これらの農はん
り、だっ穀を中心にして、どうもろこし、さつまいもの収かくなどが重
労働時間は、十一時間になっている。第二の農はん期は十月で、いねか
け、だいこんの種まきなど、いそがしい仕事がたくさんある。一日平均
ん期は、六、七月で、田植え、大麦小麦の収かく、さつまいものなえつ
ことがわかる。つまり、二回の農はん期があるわけである。第一の農は

耕す
能率。

ちくさん課
労働力

所得金額も多くなっている。

次に、わたしたちは、この村の牛馬の一年間の労働日数を調べてみた。すると、平均して、次のような結果が出た。

馬	牛	田畑の仕事	
		うんばん	よそにやとわ れる日
二八日	二七日	三四日	一三日
六六日	三三日	七四日	計
一二七日			

これによると、この村の馬や牛は、一年の半分以上遊んでいることになる。これでは、こやしをつくるために、かっているようなものである。もっと馬や牛の利用を考えて、遊んでいる日に、かちくのいない家に安く賃貸してもするようにすれば、仕事の能率も上がって、労働時間は、もっと少なくてすむようになるだろう。

以上が、わたしたち二はんの共同調査のあらましである。わたしたちは、この調査研究から、農村の仕事をもっと計画的に能率をよくして、労働時間を少しでも少なくしなければならぬと感じた。牛や馬のほかにも、もっと機械を利用することが考えられるし、主婦の労働を助けるために、台所の改善なども考えられる。農村生活の能率化を、わたしたちは考えたいと思った。

氷のとけかたの研究

夏休みになって間もなくの、ある日の午後でした。母が、おやつにアイスクリームをくれました。弟のぶんも、わたしが預かりましたが、弟は、どこへ遊びに行ったのか、見あたりません。わたしは、弟のぶんをつくえの上に置いて、弟をさがしました。けれども、やはり見あたりません。しかたがないので、弟の帰って来るのを待ちましたが、アイスク

所得金額

うんばん

賃貸し

共同調査
あらまし

計画的に

能率化

昭和36年 2年1
あたらしいこころ

田うえ
東条書籍

たねまき

春がくると、なわしろに
いねの たねを まきます。な
わしろは、日あたりがよくて、
水の 出し入れの べんりな
ばしょを えらびます。この
なわしろで、なえが すくすく
そだつて いきます。



しろかき

なえの そだつ あいだに、ほかの
田では、田うえの じゅんびを しま
す。田の 土を ほりおこして、こま
かく くだきます。それから、水を
入れます。つぎに、土を たいらに
します。この 土を たいらに する
しごとを、「しろかき」と いいます。
しろかきの すんだ 田に、なわしろから
なえを はこんで きて、うえるのです。

田うえ

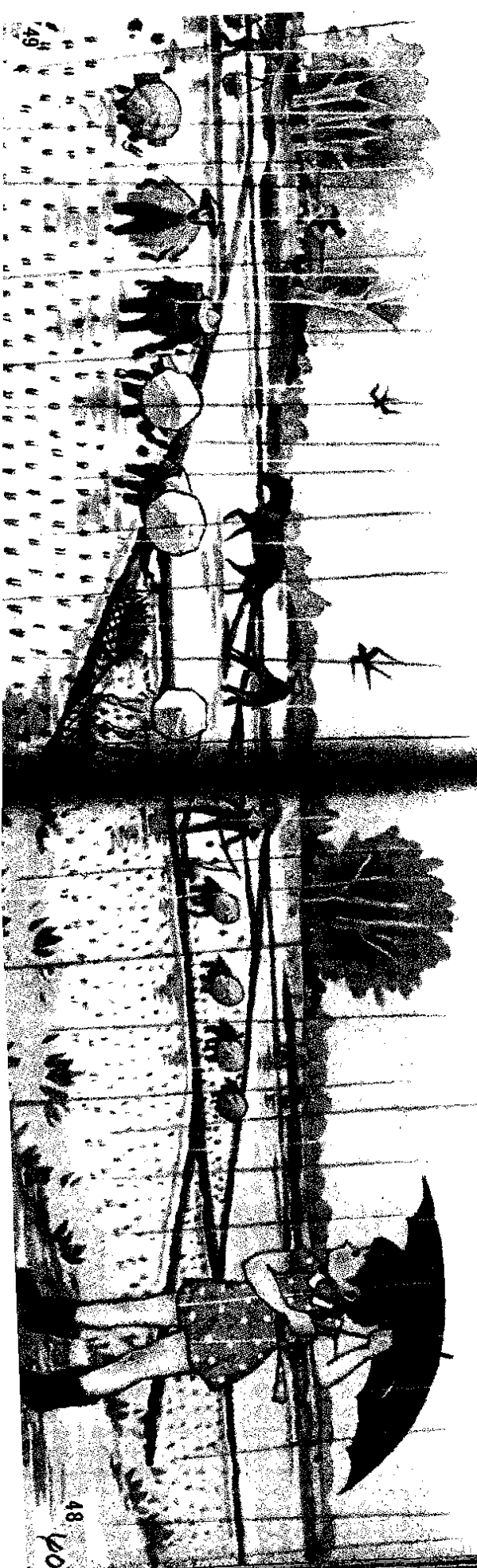
きょうはうちの田うえです。
雨がふってあるので、わた
しはうちの中で本をよん
でいました。すると、おかつ
で、おばあさんが、
「みえ子。おちやのしたくが
できたから、みんなをよんで

きておくれ。」

といました。わたしは、かき
まをさして、田んぼへでかけま
した。

雨の中ではたらいでいる
人が、あちらこちらにたくさん
見えました。田んぼには、みどり
のなえが、ずんずんうえられ
ていきます。わたしはいそい
であるきました。

うちの田では、みんながいっ



しょうけんめいに なえを うえて いました。しんせ
きの おばさんや、きんじよの 人たちも います。わ
たしが、大きな ニエで、

「おちゃだよう。」

と いったら、みんなは、びっくりしたように、いっしょ
に ニちらを 見ました。おかあさんが、

「もう ちよつと うえてからね。」

と いいました。

みんなは、また 田うえを つづけました。一れつに
はるんで、きまりよく なえを どの 中に さして

いきます。まるで、きかいのように、手が うごきます。

みんな、雨に ぬれるのなんか、くいきそうです。ほ

かの 人は、みんな すげがさを かぶつて いますが、

しんせきの おばさんだけは、古

い むぎわらぼうしを かぶつて

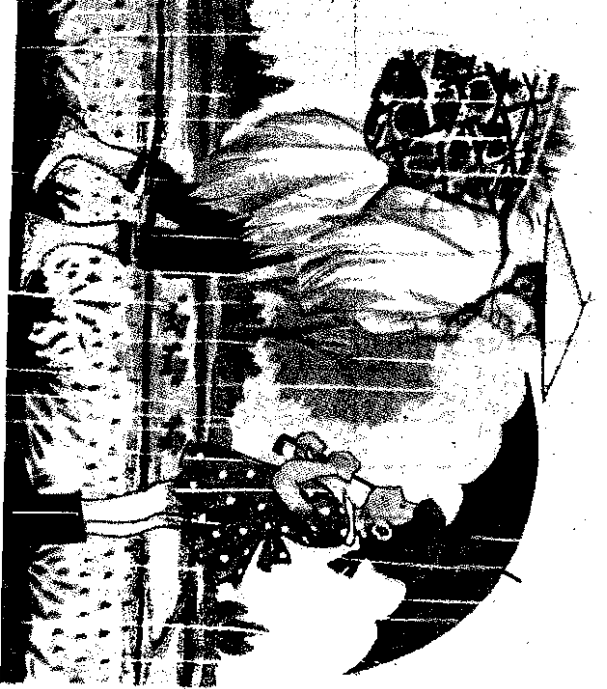
います。

おとうさんが、なわしろの ほ

うから、なえを かごに 入れて、

おもそうに せおつて きました。

おとうさんは、なえを おろすと、



「よびに きて くれたのかい。もう じき 行くよ。」
と いいました。わたしは、

「はい。」

と いいました。

まえより 大つぶの 雨が ふって きました。とお
くの ほうで はたらいで いる 人たちは、ぼうつと
して、見えなく なりました。

わたしは、

「さきに かえるよ。」

きました。

草とり

いねは だんだん 大きく な
ります。いねの あいだに、草が
はえて きます。この 草を と
るのが、いねを じょうぶに そ
だてるのに だいじな しごとで
す。この しごとを、あつい 夏
の 日を あびながら、なんべん
も します。



たねまき

○ いねの たねは、いつ まきま
すか。

○ どんな ばしよに まきますか。

しろかき

○ しろかきとは、どんな しごと
ですか。

田うえ

○ みえ子さんは、なぜ 田んぼへ
行ったのですか。

○ うちの 田では、みんながいつ

す。

わたしの おじいさんの かみの毛は、ま
るで ゆきのように まっ白です。

● それから、つぎにということばで、じゅ
んじょが よく わかります。

田の 土を ほりおこして、こまかく
だきます。それから、水を入れます。つぎ
に、土を たいらに します。

どんぐりに、きりで あなを あけました。
それから、マッチの じくを さしました。
つぎに、クレヨンで いろを ぬりました。

えて いました。

と かいて あります。田うえの
ようすは、どんな ようすですか。

草とり

○ 草とりは、なんの ためにす
るのですか。

● ちゅういする ことば

水の 出し入れ

そだつ

きまりよく

ぼうつとして 見えなくなる

春

春 春 春

出

出す↑入れる
出 出 出

見

目で ものを 見る。
見 見 見

古

古い↓あたらしい
古 古

草

草が はえる。草花
草 草 草

夏

夏やすみ
夏 夏 夏 夏

(二) 田んぼの水

水は、いねを そだてるのに、たいへん たいせ
つな ものです。

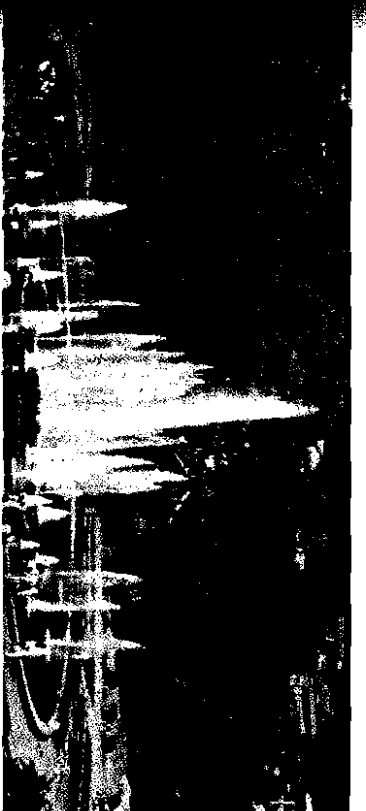
春に になると、いねの たねを
まきます。いねの たねを まいて、
なえを そだてる ところを、なわ
しろと いいます。なわしろには、
水が じゅうぶん あって、日あた
りの よい ところを えらびます。



なえが 大きく になると
ら 田んぼに うえかえます。その し
ごとを 田うえと いいます。田うえを
する ときには、まず、田んぼの 土を
ほりおこして、こまかく くだきます。
それから、水を入れた、土を やわら
かく します。そこへ、なえを うえる
のです。

田んぼには、うえられた なえが 大
きくなるまで、いつも 水が いります。

入。
れる



(三) ふん水

ふん水は、こうえんの 中など
で よく 見かけます。
ふん水には、いろいろ めずら
しい ものが あります。ひろ
いけの 中から、水を 何本も
たくく ふき上げて いるのが
あります。また、石などで こし

あります。よるに になると、
ふきだして いる 水を、
いろいろ いるの でん
きの ひかりで てらして
いるのも あります。まる
で にじの ように、うつ
くしく かがやいて 見え
ます。



ふん水
上げる